

ISSN 1882-5524

日本アイスランド学会会報

39

Bulletin of the Society for  
Icelandic Studies of Japan

39

# 目次

1. 論文	
伊藤 壺	
漫画に描かれる北欧神話：視覚芸術との差違と共通性	
[Visual Representations of Norse Myth in Japanese Manga/Animated Manga].....	1
2. 公開講演要旨	
(1) 山田 慎太郎	
口承文学から考える紛争解決をめぐる分析	
—アイスランド・サガとアイヌ・散文説話の比較から—.....	30
(2) 森 信嘉	
ノルウェー中世幻視譚.....	32
3. 学会報告	
(1) 松本涼・矢野百合愛・渡部正平	
トークセッション 『『ヴィンランド・サガ』からみたアイスランド』.....	34
4. 彙報	
(1) 日本アイスランド学会2019年度活動状況.....	39
(2) 2019年度会員活動状況.....	41
(3) 会員の異動.....	42
5. 日本アイスランド学会会則.....	43

## トークセッション 『ヴィンランド・サガ』 からみたアイスランド

松本 涼・矢野 百合愛・渡部 正平

2019年11月4日にトークセッション 「『ヴィンランド・サガ』 からみたアイスランド」 が立教大学池袋キャンパス太刀川記念館にて開催された。『ヴィンランド・サガ』は11世紀初頭、ヴァイキング時代の北欧を舞台とした幸村誠氏によるマンガである。本作は、2019年7月から12月までNHK総合にてアニメ版が放映された。原作も北欧の歴史的知識を存分に生かした内容だが、WIT STUDIO制作のアニメ版はストーリーの時系列を変更し、主人公の少年トルフィンの成長を追う形となったため、トルフィンの故郷であるアイスランドの描写が原作より詳細になっている。本企画は、このようなアニメ化の影響を背景とし、アイスランドの歴史や環境と『ヴィンランド・サガ』とのつながりを考察する場として、主催・立教大学、共催・駐日アイスランド大使館、そして講談社/ツインエンジンの後援によって実現したものである。学術とポピュラーカルチャーとの交錯という意味でも貴重な機会となった。本稿では、登壇者の一人である松本がイベントの概要を記した後、聴衆として参加した矢野百合愛氏と渡部正平氏による参加記を掲載する。このような企画を今後続ける際の参考になれば幸いである。

当日は事前申し込み制だったが、170人の定員がすぐに埋まるほどの盛況だった。マンガ『ヴィンランド・サガ』は2005年4月に講談社の『週刊少年マガジン』で連載を開始し、同年12月に『月刊アフタヌーン』に移動した作品であり少年/青年マンガに分類されるが、聴衆の半分以上は女性で男女問わず人気が高いことがうかがえた。最初に、アニメ版のプロデュースを担当するツインエンジンの藤山氏より、貴重な制作過程の映像を交えながらアニメの見所が紹介された。その後、小澤実氏、松本涼、伊藤盡氏の3人がアカデミックスピーカーとして登壇し、それぞれの専門分野から『ヴィンランド・サガ』を解説した。小澤氏はヴァイキングとの関わり、松本はサガの反映とアイスランドの環境、伊藤氏は奴隷の描写を中心とした話となった。その後休憩を挟み、原作者の幸村誠氏とスピーカーによるパネルディスカッションが行われ、キャラクターの造型から北欧神話まで多彩な話題が取り上げられた。全体の司会は駐日アイスランド大使館の保坂亮介氏が務めた。プログラム終了後も登壇者に質問するため会場に残る参加者が多く、作品に対するファンの熱意を感じるイベントだった。(松本 涼)

トークセッション『ヴィンランド・サガ』から見たアイスランド」に参加して  
(矢野 百合愛)

私はアイスランドが好きという理由からこのトークセッションに参加した。昨年に株式会社ヴァイキング社のイベントに参加した際に『ヴィンランド・サガ』のことを教えていただき、ちょうどアニメが放送されることを知って見るようになった。当作品は中世アイスランド社会やヴァイキングの世界が描かれているため、今回のイベントは、ご登壇される先生方の作品に対する学術的な解説や討論からアイスランド史を勉強できる類稀な機会であると思い、参加を決めた。

イベントに参加する前、私が知っていた中世アイスランドの事情は限りがあったし、ヴァイキングの知識に至っては高校の世界史で習った程度であった。そのため、今回お聞きした小澤先生によるヴァイキングの世界のお話、松本先生による「サガ」史料のお話、伊藤先生による奴隷描写のお話はどれも新鮮で興味深いものであった。それと同時に、『ヴィンランド・サガ』がいかにか中世アイスランドやヴァイキングについて忠実に描写しているかということが分かり、参加後は作品に対する関心もより高まった。作品をストーリーや登場人物を重視して楽しむことも十分魅力的だが、時代背景や史料にみられる当時の生活や習慣の細かな描写に着目すると、歴史を学習・研究する身にとってもかなり学ぶ点が多くあり、作品の世界にもっと深く入り込めるのではないかと感じた。僭越ながら、数々の注目点から、イベントで特に私の印象に残った点を述べさせていただきたいと思う。

中世アイスランドに関する描写は、私の一番の関心であった。松本先生が作品の見所の1つに「燃料に芝土や泥炭を使用していたこと」をご紹介されており、この様子は原作の第1巻(幸村誠『ヴィンランド・サガ』1、講談社、2005年、158頁、165頁)やアニメの第1話で主人公トルフィンの姉ユルヴァが火を熾すシーンでリアルに表現されていた。イベント参加前、恥ずかしながら私はこのシーンに気がつかなかった。全体からするとほんの一部の場面ではあるが、だからこそ、細かい部分まで丁寧に描かれていることにとても驚かされた。大学時代に、当時のアイスランドは農業に不向きで木材を得られる森林も少ない土地であったということを知ったが、その土地事情ゆえに営まれていた、芝土を利用した具体的な生活―燃料に加え、家造りにも芝土を用いていたこと―を知ることができたのは、

このイベントに参加できてよかったと感じた点であった。このように生活の一端を示す描写は数多く存在するであろうが、トールズの家の中に吊るされた魚(同上、135頁など)や商談に用いられていた羊(同上、184-188頁)、クジラ漁(幸村誠『ヴィンランド・サガ』3、講談社、2006年、212頁)は、特に経済事情や食文化を語る顕著な例だと思われる。イベントを通して、『ヴィンランド・サガ』は時代背景や当時の暮らしなどを詳細に伝えてくれる場面が散りばめられており、中世アイスランドの様子を視覚的に見ることができる(アニメでは特に映像として観ることができる)、実に勉強になる作品であると痛感した。

丁寧な描写はヴァイキングについても同様であることが小澤先生のご説明の中で分かった。ヴァイキング時代に、750年頃以降に東方で生産されていたイスラム銀(ディルハム銀貨)と交換するため、北欧は奴隷や毛皮、コハク、タカ、セイウチやイッカクの牙などの特産品を輸出していたという経済システムの背景があり、奴隷はその特産品の中でも一番大事な商品であったことや、そしてヴァイキングにとっては銀であれば何でも貨幣として価値があったという事情が解説されていた。『ヴィンランド・サガ』にもこの事情が描かれており、地方領主ゴルムが銀の換算を行なう場面で登場する天秤ばかりやノルウェー貴族出身の奴隷少女はそれを語る存在であった(幸村誠『ヴィンランド・サガ』1、94-97頁)。これらの描写に気付くことができなかつた以前に、ヴァイキングの経済は私にとって未知の内容であったため、お聞きできたことは本当に貴重な機会であったと思う。

そして、伊藤先生が作品の見所としてご紹介されていた奴隷拘束の描写のお話は、かなり衝撃的な着目点であった。奴隷と言うと、商品として購入され、鎖でつながれたり鞭で打たれたりしながら、主人の下で一生働かされるというイメージが強かったが、ご紹介にあったのは、「与えられた作業をしっかりとこなせば"自由"を与えるという、奴隷に対してのモチベーションを与え、作業を熱心にやらせる」<sup>25</sup>という奴隷拘束の描写である。先生も仰っていたように、この拘束方法が実際に用いられたかどうかは定かではないが、ヴァイキングをテーマとした他の作品に交渉によって成立した奴隷の話があるのを聞くと、奴隷の成立過程や拘束方法には実はいくつか違う形があって、モチベーションを与える拘束の仕方もあるがちなフィクションとは言い切れないのかも知れないと考えさせられた。

---

<sup>25</sup> LifTe~北欧の暮らし~「原作者 幸村誠も登場！ヴィンランド・サガの魅力に迫る！！」より引用 <https://lifte.jp/20191205-2/> (最終閲覧日：2020年5月6日)

トークセッションを通して、アイスランドが好きで参加した私が『ヴィンランド・サガ』のファンになったように、アイスランドやヴァイキング、「サガ」史料に対してさらに関心を高めた作品ファンの参加者もいたに違いない。フィクションと学術をつなぐイベントは、双方にとって刺激と習得の多い機会であったと私は思う。中世アイスランド史やヴァイキング時代を勉強する際に重宝されるべき作品であることは先にも述べたが、この作品の面白さは、詳細な描写と作者である幸村先生の感性が織り交ざることによって倍増しているのだとも感じた。ある時はリアルな描写に注目し、ある時はストーリーに、キャラクターたちに着目する—登場人物も丁寧に描かれていることから、何通りかの読み方／見方がある、何度も読み返す中でそのたびに発見があるのが、この作品が持つ魅力の1つなのではないか。参加希望者が多い中で自分がこのイベントに参加でき、幸村先生の作品に対するお話や3名の先生方の学術的な視点による見所や解説を拝聴できたことに、心から感謝申し上げたい。

### 『ヴィンランド・サガ』トークセッション参加記 (渡部 正平)

漫画『ヴィンランド・サガ』とそれを原作にした同名のアニメについてのトークセッションを聴講するなかで最も興味深かったのは、作品内で事実と創作がどのように同居しているかが明らかにされた点であった。『ヴィンランド・サガ』は『赤毛のエイリクルのサガ』などを基にする創作物であるため、もちろん、作品に描かれるすべてが歴史的事実でもなければ、すべてがフィクションでもない。おそらく『ヴィンランド・サガ』という物語を熱心に追う読者にとっては自明のことだろうが、登壇者たちが言及したのは、物語よりも見逃されやすい些細な描写についてであり、そこにこそ作品の在り方がよく示されていたのだ。

まず登壇者たちは、作品の舞台である十一世紀初頭のヨーロッパについての詳細な調査を基にして『ヴィンランド・サガ』が作られていることを解説した。たとえば小澤実氏は、作中でヴィリバルドという名の神父がアルコール依存症者のように描かれているが、中世ヨーロッパにおいてそのような神父は特に珍しくなかったことを、松本涼氏は、当時のアイスランドと同じく作中でも泥炭や芝土が燃料として用いられていることを指摘した。また、松本氏は、アニメで描かれたアイスランドの村落では実際よりも住居が密集し過ぎていると述べ、『ヴィンランド・サガ』のすべてが事実に基づいているわけではないことも指摘した。広大な

土地を見渡して一軒か二軒の農家しか見当たらない村落の方が、現代の視聴者の多くにとっては現実味がないのかもしれない。漫画にせよアニメにせよ、中世アイスランドの再現に作品の目的はないであろうから、描写される細部が歴史的事実と違うという批判にあまり意味はなく、むしろ作品世界に説得力を持たせるための脚色として、事実と作中描写の違いに注目することの面白さが、トークセッションでは示唆されていたように思われる。

事実と異なる描写がおそらく意図的にされる一方で、今のところ事実に基づきようなない描写についても、トークセッションでは言及された。特に興味深かったのは、伊藤盡氏による奴隷の拘束具についての指摘である。奴隷制や解放民など、奴隷に関しての記述は中世アイスランド語の文献にも少なくないが、売買される奴隷がどのような拘束具で拘束されていたのか／されていなかったのかについては確たる資料がない。しかし漫画『ヴィンランド・サガ』では、作者の幸村誠氏によって「本当にそうだったのではないか」と思える説得力のある描写がされている。伊藤氏のこの発言は、筆者が読者として完全に見逃していたことを指摘するものであり、いかに自らの常識を持ち込んで作品を読んでいたかを指摘するものでもあった。

実際に生きる時代や社会の常識から完全に抜け出して作品に接することは不可能だが、作品と向かい合う際に可能なかぎり色眼鏡を外して細部に注目すること、また、たとえば『ヴィンランド・サガ』は現代社会を描いているのだと見立てて些細な描写や台詞にも立ち止まってみることは、決して無益ではない。今回のトークセッションは、歴史的事実とフィクションがどのように作品内で同居しているのか、また、一見して目を引かないかもしれない些細な描写がいかに作品世界を成り立たせ、そして作品と読者を橋渡すかを明らかにした。さらに、どのように作品と接することができるかを、ひとりひとりの読者に問いかけるものでもあったのだ。